報　告

創立30周年記念事業報告—謝辞に代えて†

大　野　　豊††

創立30周年記念事業は，本年3月末をもって，会計収支を含め，同記念事業報告ならびに国際会議報告を理事会に提出し，滞りなく一切を終了した．2年余にわたる立案検討の上，昨年6月の記念祝典を中心に，1年間にわたる多彩な記念事業を，所期以上の成功をもって実施することができた．これはひとえに多数の会員の方々が，積極的に参加され，それぞれに実力を発揮された賜物である．

とくに記念事業の遂行にあたって，準備から実施，後始末まで，3年以上の間献身された実行委員会ならびに各種委員会の委員の皆さんに，深く感謝いたします．

これら事業の内容は，準備段階からその都度，学会誌を通じて予告し，あるいはその成果を報告したので，この報告では，記念事業の遂行に尽力された委員，参加協力された会員，事務局職員への謝辞に代えて，その概略と今後の展望・課題を述べるものである．

1. 記念事業のあらまし

（1） 計画・立案のための委員会の設立

本記念事業は，1987年2月の第307回理事会の決議をうけ，準備委員会がスタートし，同年10月の第314回理事会で，30周年記念事業実行委員会（委員長：大野豊）のもとに，①祝典（式典，祝賀会）②全国大会　③国際会議　④30年史　⑤記念出版（論文募集，学会誌特集）⑥未来検討ならびに⑦特別賛助会費募集の諸計画（案）と，これを遂行するための上記委員会の設置が承認された．

顧問団　　協賛団体

創立30周年記念事業実行委員会 ─ 財務委員会
- 総務委員会
- 国際会議組織委員会
- 記念出版委員会
- 全国大会支援委員会
- 未来委員会

（2） 記念事業は，次の日程で実施された．

1989年12月	未来委員会報告書の理事会提出
1990年 2月	記念論文の選定
3月	全国大会で記念講演の実施
5月	学会誌「30周年記念論文特集号」の発行
6月	記念祝典（式典，講演，祝賀会）
10月	国際会議 InfoJapan '90 の開催
10月	「情報処理学会30年のあゆみ」の発行

本報告では，上記事業実施の順に報告することとするが，事業の詳細はこの文末の参考資料を参照願いたい．

1.1 情報処理学会“未来像”の策定

創立後30年にして，3万名に達した当学会が，「会員へのサービス向上を核としながら，情報処理の総合的な発展を図るにはいかにあるべきか」の将来像を明確にし，その具体的方策を策定するために未来委員会（委員長：尾関元会長）をもうけ，1988年3月の第1回委員会以降13回，小委員会を6回開催した．

第1段階（第1回〜第4回委員会）で各委員からの意見，提案を自由討議し，次の6項目をとりあげた．

① 学会運営のOA化

② パソコンネットワークとデータベースの活用

③ アカデミックネットワークの活用

† A Report of the 30th Anniversary of the IPSJ

†† 30周年記念事業実行委員長

④ 放送大学方式の応用
⑤ 情報博物館の実現
⑥ コンピュータサロンの実現

第2段階（第5回委員会）で，テーマを④，⑤，⑥項に絞り，「望まれる環境条件（情報ビル，情報会館）の構想」がまとめられた．

第3段階（第6回〜13回委員会（最終））では，松浦隼雄元副会長（工学院大）から「新宿地区の情報センター街区構想」を紹介された．この構想の内容は委員会が検討してきた「情報処理学会に望まれる環境条件」と一致するところが多く，また当街区側も情報処理学会を同街区の中核的存在として期待する旨，伝えられた．

これらのことから今後，新宿街区構想の検討に参画して学会の立場から意見を述べるべきであると結論され，1988年9月の理事会で承認された．

ついで，委員会において望まれる環境条件確保に向けて継続審議の是非について1988年2月の理事会にはかった結果，次の2項を追加検討することで承認された．

① 望ましい環境の候補地区を複数調査し比較検討すること．
② 望ましい環境を維持してゆくために経費増が想定される場合の対策．

委員会において各種条件を比較検討した結果，1992年に完成予定の新宿情報センター街区への学会の移転が，有力な方策であるとの結論に達した．以上の結果を「未来委員会報告書」としてまとめ，1989年12月の第338回理事会に提出した．さらに1990年1月の理事会で審議され，その後財務委員会（委員長：戸田副会長）において，「新宿情報センター街区」移転の条件設定が行われることとなった．

1.2 記念論文の選定

(1) 委員会の構成

出版委員会（委員長：石井副会長）のもとに次の委員会を組織し，記念論文の募集から選定までをすすめた．

① 記念論文小委員会（幹事：牛島元理事→村井前理事→益田理事）募集要項，選定手順の決定
② 拡大論文誌編集委員会（委員長：村井前理事）査読者割り当て
③ 記念論文選定委員会（委員長：野口前副会長，論文誌編集委員，欧文誌編集委員，および各研究会主査ならびに有識者）受賞論文の選定

(2) 受賞論文の選定経過

記念論文の応募は1989年8月31日の締め切りで114編（和文101編，欧文13編）となり，その内訳は表-1のとおりである．

受賞論文（入選論文および佳作論文）の選定については，上記の記念論文小委員会および拡大論文誌編集委員会の選定準備作業の後をうけ，記念論文選定委員会を3回開催するなど，厳正かつ慎重に選定作業が行われた．

まず第1回の委員会で，応募論文の中から43編（和文38，欧文5）を第1次候補論文として選定した（表-1）．ついで第2次候補論文として22編（和文21，欧文1）に絞った．この第2次候補論文を基礎理論・基礎技術，人工知能・認知科学・データ処理，ソフトウェア・ソフトウェア工学・システム，ハードウェアの4分野に分け，慎重審議を重ね，最終的には受賞論文として11編（和文10，欧文1），すなわち入選論文4編（すべて和文），佳作論文7編（うち欧文1）を決定した（表-2）．

受賞論文は学会誌「30周年記念特集号」（第31巻5号）に掲載された．また同時に「記念論文の公募と選定経過」についても詳細に報告された．さらに受賞者の表彰は6月18日開催の記念式典の席上で行われ，論文内容は1990年9月の第41回全国大会（東北大学）で口頭発表された．

表-1 記念論文選定経過要約

分野	応募論文数	1次候補論文数	2次候補論文数	受賞論文数
情報科学一般	1	—	—	—
基礎理論・基礎技術	14(2)	9(2)	7(1)	3(1)
人工知能・認知科学	24(1)	14	6	2
データ処理	8(2)	4(1)	1	1
ソフトウェア	18(2)	8(2)	4	1
ソフトウェア工学	16(4)	2	1	1
ハードウェア	12(1)	3	2	2
ネットワーク	6	1	—	—
システム	7	1	1	1
信頼性と安全性	1	—	—	—
応用	6(1)	1	—	—
その他	1	—	—	—
計	114(13)	43(5)	22(1)	11(1)

注）（ ）内の数値は欧文論文数の再掲

表-2 受賞論文

入選4編	佳作7編
・3-連結グラフの3分割アルゴリズム 鈴木 均，高橋奈穂美，西関隆夫（東北大），宮野 浩，上野修一(東工大)	・代用電荷法に基づく双方向的な数値等角写像の方法 天野 要（愛媛大）
・自由曲面パッチ接続問題の解決 穂坂 衛(東京電機大)	・Modularity of Simple Termination of Term Rewriting Systems 栗原正仁，大内 東(北大)
・エディタを部品としたユーザインタフェース構築基盤：鼎 暦本純一，垂水浩幸，菅井 勝(日電)，山崎 剛(日電マイコン)，猪狩錦光(日電技情システム開発)，森 岳志，杉山高弘，内山厚子，秋口忠三（日電）	・自然言語における空間描写の解析と情景の再構成 山田 篤，網谷勝俊，星野泰一，西田豊明，堂下修司(京大)
・並列回路シミュレーションマシン Cenju 中田登志之，田辺記生，梶原信樹，松下 智，小野塚裕美(日電)，浅野由裕(日電技情システム開発)，小池誠彦(日電)	・スチレオカメラのセルフキャリブレーション 富田文明(電総研)，高橋裕信(三洋電機)
	・ストリームによるプログラミングのための言語とその実現方式 久世和資(日本 IBM)，佐々政孝，中田育男(筑波大)
	・3次元ベクトル演算の並列実行に関する考察 成瀬 正(NTT)
	・ループを用いた大規模分散処理システム 鶴保征城，木ノ内康夫，星子隆幸，仲谷 元，宮川順治(NTT)

1.3 記念全国大会

会国大会運営委員会と 30 周年記念全国大会支援委員会（委員長：石田副会長）で検討を進め，第 40 回全国大会（1990 年 3 月 13～16 日，早稲田大学）を特に創立 30 周年記念全国大会として，21 世紀の情報処理研究を担う若手研究者を中心に研究発表を行った．初日の 13 日（火）は大隈講堂にて記念講演会（一般公開，無料）を開催した．参加者は 550 名で盛況であった．

記念講演 1　21 世紀における情報ネットワークの展望（同時通訳）
Ellen M. Hancock (IBM 副社長)

記念講演 2　今後の情報産業の発展について
唐津 一（東海大）

記念パネル討論　日本における情報処理教育のあり方
（司会）野口正一(東北大)，（パネリスト）草原克豪(文部省)，國井利泰（東大），牛島和夫（九大），水野幸男(日電)，三浦武雄(日立)，Bill Tottem（アシスト）

なお，14 日（水)～16（金)は理工学部にて第 40 回記念全国大会を開催した．

1.4 記念祝典

記念式典小委員会（幹事：小泉元理事）にて準備を進め，総務委員会（委員長：福井元理事）および記念式典実施委員会（委員長：安藤名誉会員）にて，当日の運営にあたった．

4 月 22 日が創立 30 周年記念日であるが，6 月 18 日（月）虎の門パストラルにおいて，関係省庁をはじめ，学会歴代役員ほか関係者，関連学会ならびに業界の有志の出席を得て，記念式典，記念講演会，祝賀会の 3 部に分かれて開催された．

当日は梅雨時であったにもかかわらず，快晴に恵まれ，事務局職員も朝から会場に詰め準備に大童であった．

1 記念式典（14：30～15：40）

式典は野口実行副委員長の開会の辞に始まり，文部，科技，通産，郵政各大臣（国会会期中のため代読）ならびに日本学術会議会長近藤次郎氏の祝辞があった．

IFIP の Bl. Sendov 会長（ブルガリア）の祝辞を日本語に要約し IFIP 日本代表の尾関氏が代読した．その中に「高度情報社会の発展は，現存の人為的障壁を取り除き，われわれの住む世界を変える」との言葉が，前年 11 月に「ベルリンの壁崩壊」があっただけにとくに印象に残った．

ひきつづき感謝状の贈呈，表彰状の授与があった．とくにその中で，30 周年記念論文の入選 4 編，佳作 7 編 41 名の著者に論文賞の表彰があった．出席者は約 304 名であった．

記念式典次第

14：30〜15：40 会場：葵（本館1F）
総合司会：小泉総務委員
・開会の辞：野口実行副委員長
・会長式辞：三浦会長
・記念事業経過報告：大野実行委員長
・来賓祝辞：文部大臣 科学技術庁長官 通商産業大臣 郵政大臣 日本学術会議会長 IFIP 会長
・祝電紹介：電子情報通信学会，照明学会，IEEE CS，学会事務センター，松下電器産業，日本ユニシス，サイマルインターナショナル
・感謝状贈呈： 司会 三木総務委員
日本電子工業振興協会，日本学会事務センター，オーム社，三美印刷，三協印刷，平和情報センター
J.C. Burston（欧文誌編集査読者）
・表彰状授与：
記念論文選考結果報告：野口記念論文選定委員長
記念論文受賞者表彰 11編 41名
永年勤続事務局職員表彰 6名
・閉会の辞：野口実行副委員長

2 記念講演会（16：10〜17：20）

式典終了後，同じ場所で午後4時10分から福井総務委員長の司会により，JR 東日本会長山下勇氏の「情報化社会への課題」について講演があった．山下氏は三井造船の社長，会長を歴任され，運輸，通産，郵政省などの各委員会の公職にもあり，非常に幅広い面からお話をうかがうことができた．会場の400席がほぼ満席の盛況であった．講演は学会誌（Vol. 32, No. 1）に掲載．

3 記念祝賀会（18：00〜20：00）

祝賀会は午後6時から鳳凰の間で，河野式典実施委員の司会で以下の式次第で行われた．

祝賀会次第

・開会の言葉：山下英男初代会長（安藤実施委員長代続）
・会長挨拶：三浦武雄
・お祝いの言葉：日本電子工業振興協会会長（青井舒一）
：日本工学会会長（尾佐竹徇）
：電子情報通信学会会長（代理：副会長 大越孝敬）
・歴代会長挨拶：小林第10代会長
・乾杯：坂井第12代会長
（歓談）
・閉会の言葉：河野実施委員

まず山下名誉委員長（初代会長）の「開会の言葉」（代読）につづき，お祝いの言葉を日本電子工業振興協会，日本工学会，電子情報通信学会の各会長からいただいた．歴代会長を代表して小林10代会長が挨拶し，乾杯の音頭は坂井12代会長がとられた．

学会創立時からの30年会員の方も多数出席（招待）され，情報処理学会の過ぎし30年を1日に凝縮したような祝賀会であった．いつまでも尽きぬ宴も，8時に河野実施委員の閉会の言葉で名残を惜しむなか散会となった．出席者は392名．

1.5 国際会議 InfoJapan '90 の開催

情報処理学会は1960年に創立と同時に，我が国を代表してIFIPに加盟，国際標準組織ISOおよびIECの活動に参画し，さらに米国のACM，IEEE-CSとの提携をすすめてきた．1970年代に3回にわたり日米コンピュータ会議を，創立20周年にあたる1980年に第8回世界コンピュータ会議（IFIP Congress '80）を共催するなど，国際的学術交流を積極的にすすめてきた．この間，会員規模も3万名に達するまでになった．

このような当学会の30年にわたる国際活動と，最近の我が国の情報処理の学術・技術の国際的評価の高まりのなかで，学会独自で主催するはじめての国際会議としてInformation Technology Harmonizing with Societyを主題とする「情報処理学会創立30周年記念国際会議」が，1990年10月1〜5日に，京王プラザホテルで開催された．

会議の運営は，組織委員会（委員長：山本卓眞）のもとに，プログラム委員会（委員長：石田晴久），運営委員会（委員長：島崎恭一）が組織され，綿密な計画の立案と周到な準備がすすめられ，28カ国，1300名に及ぶ参加があり，大変盛会であった．会議日程は表-3のとおりであった．

会議の内容としては，初日はチュートリアルにあて，講師8名（うち日本人4名）により8コースを行い，本会議は第2日目以降の4日間とし，採択論文119編（応募論文は35カ国から273編）

表-3 国際会議日程

月 日	午 前		午 後		夜
10月1日（月）	チュートリアル 9：30			17：00	
10月2日（火）	開会式 10：30	基調講演 11：00〜12：00	セッション（5会場） 13：30	17：30	レセプション 17：30〜19：30
10月3日（水）	セッション（5会場） 9：00	12：30	セッション（5会場） 14：00	17：30	
10月4日（木）	セッション（5会場） 9：00	12：30	特別講演 14：00〜15：00	セッション（5会場） 15：30〜17：00	バンケット 18：30〜20：30
10月5日（金）	記念講演 10：00	11：30			

注） 5会場ではそれぞれ A：ソフトウェア技術，B：並列コンピューティング，C：人工知能，D：高度情報システム，S：特別セッションを行う．

が，各セッションに分かれて英語により発表され，活発な質疑がかわされた．また，スペシャル・イベントとして，猪瀬博東大名誉教授（元会長）の基調講演，嶋正利氏の特別講演，ならびにSteven P. Jobsの記念講演が行われ，満場を埋めつくした参加者に，深い感動を与えた．さらにレセプション，バンケットでは，IEEE-CS会長 Helen Wood女史をはじめ，内外の有識者が集まり，IPSJ 30周年祝賀を通じて，国際的交歓を深めることができた．内容の詳細は，学会誌第32巻3号（1991年3月号）に11ページにわたり述べられているので，是非参照してほしい．

最後に，国際会議できわめて重要な会計収支について述べたい．その概要は表-4のとおり1億3,041万円の収入に対し，支出実績は1億2万円で，3,039万円の収支差額が生まれた．もっとも特別賛助会費の中から，5,000万円の助成が繰り入れられているので，実質的には1,961万円の助成で，1,300名の大規模な国際会議を成功させたことになる．これはまさに，組織委員会，プログラム委員会ならびに運営委員会が一体となっての努力の賜物である．

なお，この剰余金は，国際委員会規程により，将来の国際活動活性化に生かされることを希望する．

1.6 記念出版

1960年以来30年にわたる当学会の活動の歴史と情報処理の学術・技術の発展の跡を辿り，あわせて将来の展望を明らかにするため，「情報処理学会30年のあゆみ」（B5判288頁）を，出版委員会（委員長：石井元副会長）のもとに出版小委員会（幹事：小泉元理事）をもうけて編集をすすめ，1990年10月に2,500部を発行した．その内容は下記の目次（概要）のとおりである．

頒布については，学会歴代役員，特別賛助各社および関連の官公庁，学協会方面に約1,700部を寄贈した後，本年1月にソフトウェア各社，当学会一般賛助会社などにダイレクトメイルによるPRを行ったところ，2カ月で残部をすべて販売できた．これはその内容が，いかに現在の要望に応えたものであるかを証明しているといえる．

表-4 収支決算の概要 （単位：千円）

収入項目	予 算	決 算	支出項目	予 算	決 算
参加費	60,210	62,005	会議準備費	36,887	26,810
バンケット	4,000	3,438	会議費	74,657	65,541
テクニカルツアー	270	189			
チュートリアル	9,000	10,570	チュートリアル	7,666	7,673
雑収入	500	3,512	（小 計）	119,210	100,024
国際交流財団助成	—	700	予備費	4,770	0
特別会計より助成	50,000	50,000	収支差額		30,390
収入合計	123,980	130,414	支出合計	123,980	130,414

目　次（概要）

歴代会長（肖像）就任あいさつ
創立 30 周年記念事業
第1編　学会 30 年のあゆみ
　第1章　30 年の軌跡(各 10 年) 高橋　茂
　　穂坂　衛，大野　豊
　第2章　活動のあゆみ
第2編　規格活動の軌跡　高橋　茂
第3編　情報処理技術の発展と展望
　基礎理論(野崎昭弘)，コンピュータアーキテクチャ(相磯秀夫)，オペレーティングシステム(高橋延匡)，プログラム言語(和田英一)，データベース(植村俊亮)，ネットワーク(野口正一)，ソフトウェア工学(落水浩一郎，春原　猛)，日本語情報処理（長尾真)，人工知能(堂下修司)，コンピュータグラフィックス(中前栄八郎)，CAD/CAM(山田昭彦)，パーソナルコンピューティング（石田晴久)，応用システム（福井隆夫，高根宏士，三木彬生)
年表／あとがき／索引

1.7　特別賛助活動

賛助額	会社数
800（万円）	4（社）
600（万円）	5（社）
500（万円）	2（社）
300（万円）	1（社）
200（万円）	4（社）
100（万円）	9（社）
60（万円）	1（社）
50（万円）	11（社）
30（万円）	11（社）
20（万円）	17（社）
10（万円）	53（社）
5（万円）	1（社）
計　119 社	11,015 万円

30 周年記念事業財務委員会（委員長：出川元会長)をもうけ，諸記念事業の必要経費（予算）2 億 2,800 万円の約半分の 1 億 1,000 万円を，日本電子工業振興協会をはじめ，情報サービス産業協会，東京銀行協会，電気事業連合会などの諸団体の協力をえて，特別賛助会費として募金を行い，左表のとおり目標を達成した．また，情報処理学会会員にも，広く個人の賛助（1 口千円単位）を呼び掛け，237 名から 226 万円が寄せられた．

1.8　収支について

記念事業全体の予算 2 億 2,800 万円は，平成 2 年度総会で特別会計として承認された．収入予算でみると，①その半額にあたる 1 億 1,200 万円を賛助会費（団体および個人会員）で，②学会本部から 4,107 万円を支援し，③残額の 7,553 万円を国際会議の参加費や 30 年史などの事業収入で賄うこととし，これらの収入予算を必要経費（支出予算）として配算した．

収支の結果は，**表-5** の収支報告にみるように，3,183 万円（うち国際会議 3,039 万円）の剰余がえられた．これは，実行委員会をはじめ各委員会の委員各位の献身的努力によるところが大きい．なかでも下記の 3 点は特記されるべきであろう．

1)　国際会議では，参加者が予想を上回る一方，会議準備費，会議費の節減を図った．そのために，当初の予算では特別賛助会費から 5,000 万円の助成を予想していたが，結果は 1,961 万円で賄えた．(**1.5** 国際会議の「収支決算の概要」参照)

2)　当初は販売収入をほとんど考慮に入れなかった「30 年のあゆみ」が，寄贈した残部の 700 部余りをすべて売却できた．

3)　記念事業推進のため準備室をもうけ，専任の職員 3 名をおき，この人件費を含めた事務局経費として支出予算 4,300 万円を計上し，そのうち，学会から 1,107 万円を助成することとした．結果は収支報告に見られるように，実際にかかった 4,177 万円のすべてを上記賛助会費で賄い，学会の一般会計のお世話にならないで済ました．

なお，30 周年記念事業は，学会の特別会計であるので，来る 5 月開催の第 33 回通常総会で次の処分案を提出し，承認をうる予定である．

① 国際会議の剰余金：学会の国際委員会規程（細則）により，特定国際活動積立金，一般国際活動積立金，ならびに国際活動通常経費に各 3 分の 1 ずつを配算

② その他の剰余金：一般会計に繰入

2.　記念事業の成果と今後の展望

このたびの 30 周年記念事業の発足にあたり，「このように輝かしい時代に，情報処理関連の学術研究あるいは事業に携わる者として，その栄光と歴史的使命の重大さに思いをいたさざるをえない．ここに 1990 年に 30 周年を迎えるにあたり，これまでの歴史をふりかえり，未来への大きな節目として，21 世紀のより高度な情報社会を展望しつつ，その実現の礎となる諸事業を行う」旨を

表-5 30周年記念事業収支報告 (1988年4月1日～1991年3月31日) (単位：千円)

収入科目	予算額	決算額	支出科目	予算額	決算額
特別賛助会費	110,000	110,150	財務経費	1,360	1,117
一般会員募金	2,000	2,260			
(小 計)	112,000	112,410	(小 計)	1,360	1,117
記念祝典	500	175	記念祝典	10,000	8,477
国際会議	73,980	80,414	国際会議	123,980	100,024
あゆみ出版	300	1,955	あゆみ出版	9,300	8,862
雑収入	750	991	未来委員会	2,000	608
(小 計)	75,530	83,535	記念大会 (講演)	200	413
			記念論文選定	3,600	2,833
			(小 計)	149,080	121,217
(合 計)	187,530	195,945	(合 計)	150,440	122,334
〔学会より支援〕					
記念大会	18,000	15,568	記念大会	18,000	15,568
記念特集号発行	12,000	10,302	記念特集号発行	11,100	10,302
事務局経費	11,070	0	事務局経費	43,000	41,775
(小 計)	41,070	25,870	(小 計)	72,100	67,645
			予備費	6,060	0
			国際会議剰余金		30,390
			その他剰余金		1,446
			(小 計)	6,060	31,836
収入総合計	228,600	221,815	支出総合計	228,600	221,815

趣意書に高く掲げた．この3年余，学会会長として，あるいは実行委員長として記念事業を推進した責任者として，僭越ではあるが，記念事業について所感を述べ，あらためて謝辞とさせていただきたい．

1) 今回の記念事業では，10年前に行われた20周年記念事業をプロトタイプとし，これを発展させる形で行われたが，当時の会員数15,000名は，現在は30,000名と倍加したことが，記念論文の応募数が54編から114編へと2倍以上の増加となったことにみられるように，全国大会，記念祝典などいずれも盛会で，会員の期待に十分応えることができた．

2) 国際会議 InfoJapan '90 は，上記1.5ですでに述べたように，情報処理学会の30年来の国際活動の伝統・実績と，現在の我が国の世界における情報処理技術の評価の高まりの中で，学会創立以来初めて単独で主催した．まさに今回の記念事業の中で最大のイベントであった．多くの困難が予想されたが，プログラム委員（WG，海外も含む）46名，運営委員21名の2年余にわたる献身的努力で大きな成功をみた．しかし問題は，この成果あるいは経験を，将来にいかに生かすかにあると思われる．幸いにも学会誌3月号（1991）に各委員の反省・提言も含め詳細に報告されているので，IPSJの将来の国際活動に引き継ぎ，発展させていただきたい．

とくに，日本の情報処理関係技術の国際環境の中での位置づけを考えると，この国際会議を契機として，学会が積極的に，より主導的に活動をはじめることを期待したい．

3) 30年史の発行は，いくつかの教訓を生んだ．2,500部印刷し，寄贈した残り700部を学会誌を通じ2回ほどPRしたが，50部ほどしか売れなかった．在庫処分のため，学会の一般賛助会員（会社）と購読員（大学・研究所）に寄贈しようとしたが，これらの団体を含めて，ソフトウェア各社にダイレクトメイルで購読を訴えたところ，2カ月足らずで完売した．学協会などの社史は売れないというジンクスを破った．思うに，情報処理の30年を学会と一筋に活動してこられた各著者が，それぞれ自分の体験を通して，専門分野を愛情をもって記述されているからに違いない．しかも30年前といえば，我が国の情報処理

研究の原点である．したがって，今後10年ごとにこの「30年のあゆみ」を基礎に，Fact Data を積み重ねることにより，比類ない情報処理学会史が将来に生まれていくのではないかと考えられる．当学会も今や OA 化がすすみ，学会活動のデータベース化も容易に行える環境が整備されつつあるので，是非活用していただきたい．

4) 未来委員会の活動は，委員会の作業が中心で，とくにその報告をまとめて，学会誌などを通じて公にしてないだけに，1989年12月の理事会に提出の「未来委員会報告書」を学会の将来活動の指針として生かされることを望みたいが，理事会ではこれを受けて，慎重審議の結果，学会事務所を新宿情報センター街区へ移転することが，このほど決定されたとお伺いしている．新装なった都庁の傍で，まさに東京の中心街への進出である．これにともない，今までの学会のイメージである「清く貧しく」というより，活力ある事業体としての学会活動が期待されるのは，言うまでもない．

創造的学術研究を掲げて活動する学会が，創立記念事業を行うのは，申すまでもなく，単なる過去へのノスタルジアではなく，過去を総括し，将来の活動指針を生み出すためであるとすると，今回の30周年記念事業の成果は，十分にこれに応えることができたと信ずる．創立40周年に向けての情報処理学会の発展を祈る．

参考資料

1) 情報処理学会創立30周年記念事業　趣意書
2) 情報処理学会創立30周年記念国際会議　趣意書
3) 未来委員会報告書（本文，別紙資料，付属資料）．
4) 創立30周年記念国際会議報告（学会誌第32巻3号（1991））．
5) InfoJapan '90 Information Technology Harmonizing with Society（I，II，1990）．
6) 情報処理学会30年のあゆみ—活動の軌跡と技術展望（90年10月発行）．
7) 創立30周年国際会議報告書（91年3月作成）（本文，資料）．
8) 創立30周年記念事業報告書（91年3月作成）（本文，資料）．

（平成3年4月25日）